

事故防止に向けた安全対策 【 バスケットボール 】

1 競技特性

バスケットボールの競技者登録数は約56万人、そのうちアンダーカテゴリー（小中高）が51万人となっている。バスケットボールは激しいトランジションとともにゴール付近で体を張つてのポジション争い、ディフェンスをかわし、シュートを打つための急激なストップやジャンプ、リバウンド争い、ルーズボール争いなど様々な展開がある。

バスケットボールで起こる怪我は練習よりも試合での発生率が高く、足間接捻挫や疲労骨折、アキレス腱炎、膝靭帯損傷、半月板損傷など下肢の怪我が多い競技である。

本県高等学校大会中には、速攻でシュートを行った際、守備側が防御のために接触が起こりインドライン先にある体育館壁に激突し、頭部を強く打ち付ける事故も複数発生しているなど、安全対策には十分な対策が必要とされている。

2 想定される事故事例と予防策

(1) 主として【施設・設備・用具】が要因となって起こる事故

想定される事故やけがの原因（事例）	傷害例	予防策
・ボールの空気圧が適切でない ・ゴールが固定されていない ・エンドラインと壁の幅が狭い ・ベンチとサイドラインの幅が狭い	捻挫、突き指、骨折 転倒、打撲（特に頭部）	・使用前に空気圧を適切な値に調整する ・移動式ゴールの固定部分の定期的な点検 ・男子の会場にはしない ・審判に協力を依頼し、プレイヤーの守る位置を下げさせる

(2) 主として【活動内容】が要因となって起こる事故

想定される事故やけがの原因（事例）	傷害例	予防策
・過度・不当な触れ合い ・不適切なボールの取り扱い	捻挫、突き指、骨折 転倒、打撲（特に頭部）	・ルールの理解を指導者・選手ともに深める ・故意による相手選手へボールを当てる動作をしない（特に、ライン付近での攻防で起こりやすいことを理解し正当なプレーの中で行うよう指導すること）

(3) 主として【環境条件等】が要因となって起こる事故

想定される事故やけがの原因（事例）	傷害例	予防策
・高温多湿の環境下や長時間にわたる練習による熱中症	熱失神、熱疲労、熱けいれん、熱射病	・環境状況に応じた運動、休憩、水分補給等の計画を立てる ・冷房が使用可能な施設においては積極的に使用する ・効率的な換気を行う ・夏季の大会では、メディカルタイムアウトを適用し、水分補給の時間（1分）を各ピリオドに設定する。 ＊メディカルタイムアウト 各クォーター5分経過後の時間が止められる状況で審判員がメディカルタイムアウトを宣する